

山と博物館

第42巻 第11号 1997年11月25日

大町山岳博物館

冬期特別常設展 八方尾根・近代スキーの父 福岡孝行

1997.12.2 ~ 1998.3.31



福岡孝行（昭和12年頃）

福岡展開催にあたつて

丸山
彰

いよいよオリンピック開催まであと僅かとなつた。世纪の大事業が私たちの近くで開かれることは大変光榮なことである。私も特に八方尾根には数えきれない思い出がある。

麓の細野（現、八方）に戦争中家族とともに疎開し、農家の一室を借り、不自由な生活のなかでスキーにかかる本を書き、翻訳を続けながら八方尾根の開発に尽力した今は「き福岡孝行先生の功績は忘れることができない。

誰からも親しみ愛された先生の人柄は、細野の人達に信頼された。いろいろの難問題はあつたが、それを解決して昭和二十二年三月、念願の第一回リーゼンスラローム大会の開催にこぎつけた。大会の前夜は遅くまで準備に追われ、僅かの睡眠しかとらなかつたにもかかわらず朝五時起床、スキー板を担いで黒菱の出発点まで三時間歩いて登り、時間を合わせた最も大切なストップウォッチを懐に先生が前走を務めた。通信手段の拙かった当時は、出発係と決勝係が事前に時計を合わせ、打合せた時刻によつて競技が進められたのだ。福岡先生はこの大事な時計を懐に名木山の急斜面を凜とした真剣な面もちで見事なフォームで滑り降りて行つた。その時は名木山の途中に立つていたのだが、先生のその姿を今も鮮やかに思い出す。自分が提唱して拓いたコースの責任者として前走を務めた先生の立派な態度と優れたスキーテchniqueに、下で見守る大勢の観衆が一瞬どよめき、拍手がいつまでも止まなかつた。

その後大会は半世紀にわたつて続けられており、毎回千人を超す参加者を得て、権威ある地方大会として定着している。オリンピック男子滑降コースは、先生の拓いたコースに沿つて行われる。ご存命であつたらと残念でならない。

先生は自著の冒頭に「スキーこそわが生命」と書いている。スキーへの深い思いがうかがわれる。

（大町市在住、山岳博物館顧問、日本山岳会会員）

福岡展は山岳博物館一階展示室にて三月三十一日まで開催します。通常料金にて本展もご覧いただけます。（毎週月曜日休館）

（大町山岳博物館）

わが父福岡孝行をおもふ

福岡孝純

一、朝日に映ゆる白馬の

千古の雪を眺むれば

若き血潮はたかなりて

希望は燃ゆる我が胸に

(略)

二、理想の峯は遠くして

試練のあらし猛けるとも

太平開かん日の本の

強き細野の我が盟

これは、父孝行（一九二三～一九八一）が第二次世界大戦後、疎開先だった細野（現白馬村八方）の青年団のために作曲した歌の歌詞である。戦後の荒廃と貧困の中、父は食べるために田に出て、その片手間に地元の人々と夢を語り合つた。冬はもっぱら若い人々とスキーリングをし、帰つては地炉を囲んで、外は雪の吹きすさぶ中、スキーリングに花を咲かせた。

父は大いに夢を語った。「イタリアのドロミテのマルモラータには、大滑降コースがある」「ドイツのガルミッシュ・バルテンキルヘンにはすばらしい大回転（リーゼン）コースがある。……細野はこのようなスキーリングが開かれれる。その八方で今年、冬季オリンピックのダウントヒルとスーパーGそしてジャンプや複合競技が開かれれる。

「志あるものは事ついに成るなり」と後漢書にあるが、当時リーゼンスラローム・コースを開いた人々の情熱はついに八方を世界の檜舞台にまで押し上げたのだ。夢は現実（下りームズ・カム・トゥルー）となつた。

一生スキーにスポーツに夢を追いつづけた



陸上トレーニング中（中学時代）



立山登山中（昭和7年、左端）

父孝行は、どのような生い立ちをたどつたのだろうか？ 大正二年に生まれた父は幼少時は病弱気味であり、それゆえ小学生のときは東京を離れ、相模の国連堂海岸に引っ越し地元の学校に通つた。そして海洋性の自然豊かな環境の中で健康を取り戻す。身体を動かすこと興味を持ち、東京へ戻り、学習院における中学生活では陸上競技に打ち込み、八〇〇m、一五〇〇mの記録保持者となり、続いで高等科では八〇〇m、一五〇〇mとともにインターハイで優勝し、学習院の黄金時代を築いた。この時の好敵手が早稲田の中村清である。

（雪崩の言語表現の地域差に関して）

父孝行は、どうして日本語の素晴らしさに魅せられ、国学をひもといり神道を追求したりして、日本語、特に日本の地名と言葉のかかわりにも強い関心を持った。

東大の言語学科における卒論は「雪崩の言語表現の地域差に関して」であった。

また、人間行動の倫理的側面にも興味を持ち、和辻哲郎や鳥居龍藏の考え方にも影響を受けている。父孝行の行動の特徴は、書齋で考えるだけでなく大自然のキャンバスに身を投じ、そこで行動することにより人間は全き人間としての自分を取り戻せると

考えたことである。自然と一体となることにより調和的人格が作りだされる、そこには生命の躍動がある、としてスポーツ、特にスキーリングの活動に深く傾斜してゆくのである。

東洋と西洋、調和とエネルギーの絶妙のバランスこそ父が常に求めていたものである。



大学時代

スキーリングは中学生のときにはハシネス・シュナイダーライダーの来日に大きな刺激を受けて始めた。大学生になり、練習のしすぎで気管支炎になり陸上競技を引退してから本格的となつた。このころから登山とスキーリングに急速に傾倒していく。夏山、冬山、岩登り、スキーリングなどから大きな影響を受けた。特にファンボルトの信念である「詩と哲学の総合により人間は

魂の最奥の深みに達する」ということの感銘を受けた。そこに父はギリシア的なものの、よりダイナミックな自然と対するロマン主義としての復活を見たようである。

そしてその一方では日本語の素晴らしさに魅せられ、国学をひもといり神道を追求したりして、日本語、特に日本の地名と言葉のかかわりにも強い関心を持った。東大の言語学科における卒論は「雪崩の言語表現の地域差に関して」であった。



「スキーの寵児」撮影中（昭和12年）



福岡一家（昭和26年頃、右端筆者）

この一年を出版し、ひねらないで外傾によつてカジ取りをするスキーこそ正しいスキーであると述べたのである。また、猪谷六合雄氏が極端な外傾を千春少年にすすめた時も、これをウルトラ外傾であるとコメントしている。

このような流れの中で、父はオーストリアのバイオニスト教授による正統派スキーの実技指導へと日本のスキーの歴史は流れゆく。現日本スキーの第一線で活躍している人の多くが当時クルッケンハウザー教授のアシスタントをしていたアイスペーレン（白熊・助

あるとして、形式主義を嫌つてゐる。

不幸にしてこのころから日本のスキー界は、フランス式のひねるスキーに毒されてゆくが、孝行はひとり敢然とこれと斗争し、自説を主張した。『今日のスキー』（一九四四年）、『自然なスキー』、『正しいスキー』（一九四八年）を出版し、ひねらないで外傾によつてカ

ジ取りをするスキーこそ正しいスキーであると述べたのである。また、猪谷六合雄氏が極端な外傾を千春少年にすすめた時も、これをウルトラ外傾であるとコメントしている。

このような流れの中で、父はオーストリアのバイオニスト教授による正統派スキーの実技指導へと日本のスキーの歴史は流れゆく。現日本スキーの第一線で活躍している人の多くが当時クルッケンハウザー教授のアシスタントをしていたアイスペーレン（白熊・助

自然であり無為であり、大靜の美と言えるであろう。何氣ない無造作に秘められた勇敢はまた同時に最高の優雅であり、この二つは決して相反して対立するものではない」と「自然なスキー」の中で述べている。

同様に、「スキーの心身を調整、強化するにはたまき自然との調和格合の要求は、われにとつて自然必然的なものであり、われわれを退化逸脱からまもる眞の文化価値を有するものといえよう」とも述べている。孝行にとり自然、山は古典以上の古典であったし、アルビニズムはこの自然との調和格合への探究の跡であった。

「物を格（ただ）して知に到る」と礼記にあるが、孝行の自然との対話のなかで博物といふことは大変大切であった。文化人類学や民俗学的な流れを好み、戦後、大町に山岳博

物館が建設される時には大変な情熱を注ぎ込んだ。父はしばしば私達子供にもルソーの「エチャニアで滑り降りるスキー家の姿は、正に宇宙的な安定を示すものであり、老子の説く手の愛称）で占められていることから、スキーの本流を創り出した孝行の努力が見て取れる。

しかし孝行が欲したのは技術論争ではない。

「壁のような急斜面を無造作にテンポクリスチヤニアで滑り降りるスキー家の姿は、正に

育、事物による教育、人間による教育、の三段階がある」と述べた。

一九六三年に孝行は西ドイツに招待され、「日本とオリンピック思想」というテーマで講演し、ドイツオリンピック協会から黄金のブリケート（メダル）を授与された。すでに

ドイツとの交流は戦前から続いていたが、スポーツ哲学、スポーツ文化、方法論、コーチング、トレーニング法など多岐多様にわたる日本への紹介が授与の理由だった。

ドイツのスポーツの哲人であるカール・デイム教授や、ゴールデンプラン（スポーツ施設建設のナショナルプロジェクト）の立案者であるゲルト・アーベルベック氏、また日本本の伝統的な武道家である小笠原清信氏らとの親交を通じ、スポーツ活動こそ人間にとりかけがえのない価値を有する普遍的なものであり、すべての人々が将来はスポーツ活動の素晴らしさを味わうべきであると考えていた。

された八方リーゼンスラローム大会の碑の詩にも見てとれる。



クルッケンハウザー教授と（昭和54年）

康づくりの広汎性

スポーツや健

康づくりの広汎性

有した父であつたが、晩年は特

にスポーツ・ク

ラブ的な精神の

もとに地域共同

性を構築するこ

とに強い意欲を

持つていて。こ

れらは一九七六

年には大町、北は小谷

相よらいで

リーゼンスラロームコース開く

孝行は常に夢を追い続けた。常にバイオニアとして、種々の面で多様な活動を繰り広げた。しかしその心はいつも人々を開かれており、人々と語り、共に生き、共につくりあげてゆくのが大好きであった。そして自然にもどることによりいつも全人的な、生き生命の調和のとれた生き方を大切にしたのである。

自分だけの宝物

渡辺逸雄

太平洋戦争終戦の翌年、旧制大町中学一年

生になつた私は、大人と子供位もの体格体力差のある五年生までの全校マラソンで、どうしたことが五百人以上の中で五十七位になつてしまつた。

さあそれからが大変なことになつた。

「おまえは北城村（現白馬村）からの汽車通だからスキー部に入れ！」

「おまえは全校マラソンで五十七位だから、ディスタンス（今のクロスカントリースキー）をやれ！」

なんとも恐ろしい先輩の命令には唯、「ハイ」と言わざるを得ない時代であつた。

当時大町には開店したばかりの運動具屋さんが一軒あり、学校の帰りの汽車の時間まで、スキーの金具（バッケン）の取付や、スチールエッジの取付を手伝つたものだつた。その店へディスタンスのスキーを注文したのに、入荷したのはイタヤの単板で幅の広い普通のスキーだつた。何のことはない、運動具屋のオヤジさんはスキーに関し

ては素人だつたのだ。そこ



昭和25年、手造りのディスタンススキー式にてスキー大会に出場

らなかなかのものだつた。

ストックは、石突きへ入る太さの、節の捕つた竹を探して長さを身長に合わせて切り、リングを細皮で編み、手皮を付けて自慢の手造りストックの完成だ。

靴が難問だつた。当時ディスタンスの革靴など中学生の私にはどうあがいても手に入る代物ではなかつた。しかし戦時中兵隊さんの履いていた軍靴は、終戦直後ゆえ世間に広く出回つていて比較的入手し易かつたのでこれに決めた。靴屋さんに頼んで先を短く、幅を狭くし、底皮を加工してもらい、ようやく子供用ともいえるディスタンススキー靴ができる

た。そしてバラフィンを溶かして筆で塗つて防水処理をしたものだ。

大変な苦労をしてようやく手にしたディスタンススキー式だ。それこそ大切にし、手入れもよくしたものだつた。

サラリーマンとなつた頃は時代も変わり、運動具店も増え品数も豊富になり、手軽に良物は手編みのリングが一つ残るのみとなつてしまつた。

中学二年生の夏、友と初めて白馬岳へ登つた。佐渡ヶ島と日本海へ沈む夕日の素晴らしい感動し、翌日からボッカをしながら毎日毎日、日帰り白馬登山をしたのが山への病みつきである。もちろん子供用の登山靴もある

うはずなく、大きめの地下足袋に雪渓ではワラジを履いたものだ。木製の背負い子と荷杖はかろうじて無事我家の物置に残つてゐる。そんな頃、松本のヤマトヤ運動店で門田のビックルを見つけてしまつたのが運のツキといふもの。

「社長さん、このビックルを是非欲しいが、今はお金がありません、バイトをして貰いに来れるから誰にも売らないでとつておいてください、お願いします」……

「今日持つていけ、代金はできたときでもいい、置いとけば売れてしまうから」

「ありがとうございます。ありがとうございます。社長さん……」

というわけで翌年も白馬岳へボッカ、次は燕山荘へ住み込みバイトと、毎年の夏休みは山暮らしとなつてしまつた。もちろんビックル

も私の宝物であり、部屋の壁で光つていつこよかつた。トリコニーだと鉢の種類の講釈を言つては、松本の竹内靴店で足型をとつてもらつてはオーダーメイドした。横広のキスリングの重荷とバランスがとれるとかで、とても重い鉢を履いたものだが、ビブラン底が出回りはじめ、鉢底を外して張り替えてしまつた。今にして思えば鉢底のままにしておけばよかつたと残念ではあるが、物置の邪魔物にするよりも、山岳博物館で展示してもらつてゐる。



山と博物館 第42巻 第11号

発行 一九九七年十一月二十五日発行
大町山岳会会員・山博友の会運営部長
TEL 026-421-1210-1222

印 刷 大糸 タイムス 印刷部
郵便振替口座番号〇〇五四〇一
山暮らしとなつてしまつた。もちろんビックル